
誰の勝ち？

三亜野 雪子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰の勝ち？

【Nコード】

N4512E

【作者名】

三亜野 雪子

【あらすじ】

第三弾です。えっと、今回は平次と和葉も登場。まあ、他愛無い話ですね（笑）

天気は晴れ。

気温は上々。

そんな普通で平和な日。

「だあかあ、何でそうお前は頑固なんや！」

「お前に言われたくねーっての！お前こそその鈍さをどうにかしろよ！」

この二人は何故か喧嘩をしていた。

黒い髪に白い肌の工藤新一。黒い髪に黒い肌の服部平次。そんな二人を遠目で見守るのはそれぞれの彼女、毛利蘭と遠山和葉だ。

確かに新一は頑固なところあるけど。

確かに、平次はめっちゃくちゃ鈍感や。

二人は心の中で二人のことを納得している。止めようとする素振りも見せないのは、そんなことしても無駄だということがもうわかっているからだ。

溜め息を深くつくそんな音も今の二人には聞こえていない。

「大体、お前はいつも俺を巻き込みすぎだ!」

「何や!どうせ暇やろうと思てせっかく誘ってやってんのに」

「余計なお世話だ!」

「そらわるうことしたなあ!」

治まるどころか次第に悪化していく様子に流石の彼女達も焦りだす。しかし、やはり二人の声には聞く耳持たずで反応すら示さない。

「どうしよう、和葉ちゃん」

「私だってわからんよお」

おろおろと困っていると突然目の前がバラで満ちる。一瞬のことで啞然としているとにつこりと爽やかな表情をした彼が顔を出した。

「お困りのようですね、お嬢さん方」

「「快斗君!」」

そう、彼は黒羽快斗。以前怪盗キッドとして世を騒がせた人物だ。だが、それを知るのは極小数の者のみ。その少数の中にこの四人が含まれている。

「そうなんや！まああの二人がもめててな」

「見たところそうみたいだな。よし、待ってな、俺に考えがある」

そう言つて快斗は二人の元にスタスタと向かつていく。蘭と和葉はその姿をじつと見守っている。

「だから！」

「何や！」

「はいはいはいはいはいはい！喧嘩はそこまでえ！」

うるさいほどの声ではいを連続して繰り返す。流石にこれには無視ができなくて、二人はじろりと快斗を睨んだ。

「何だよ、快斗」

「ちよつとどいててくれへんか？黒羽」

「まあまあ、このままじゃ埒があかないから俺が解決させてやろつってんだからそんな扱いするなよ」

怪訝な顔で見ってくる二人にずっと意味ありげな笑みを向ける。そしていつもの手つきで何もないところからぼん、と何枚かの紙を出した。

「今からある話を出すからその話の謎をどちらが先に解くか。先に解いた方に負けた方が謝るってのでどうだ？」

「誰がそんなこと」

「そうや！」

「あれ？もしかして自信ないとか？」

その言葉に二人は反応する。快斗は残念そうに蘭達の所に戻ろうとする。

しかし、彼の肩を新一が掴み、止めさせる。

「ちょっと待て」

「誰が自信ないやて？」

上手い！

二人の性格を見抜いたその鮮やかなやり方に蘭と和葉は感嘆した。快斗は振り返りざまにウィンクをして見せて二人と向き合う。そし

て咳払いを一つ。

「じゃあ始めるぜ」

先ほど出した紙を一枚二人の前に出す。それはある靴屋の絵だった。その可愛らしい絵本のようなイラストに一瞬眉を寄せる二人。

「ある靴屋さんに働くおじいさんがある日、以前からの親友にこんなことを聞かれました」

まるで子供に聞かせるようにちょっと大げさな声を上げて快斗は話し始める。既に呆れ始めてる二人のことは一切無視で。

『お前はいつも輝いているな』

しみじみ言うその言葉におじいさんは笑いました。

『それはちゃんと自分が必要なものが見えているからだよ』

親友は一体何が見えているのか、と不思議そうな顔で尋ねました。しかし、おじいさんはちゃんとした言葉では答えられないと言うのです。

『じゃあ、ヒントだけでも教えてくれないか？』

おじいさんは悩みました。必死な親友の姿を見て、やっと決心したようにヒントだけならと諦めたように言いました。

『人が輝くために必要なものは外ではなく、中にあるんじゃない？』

意味のわからないその言葉に親友は更に悩んでしまいます。

『じゃあ、もうちょっとだけヒントをやろう。一つは鏡。一つは未来。一つは光じゃ』

「では、おじいさんが言う輝くために必要なものとは何でしょうか？」

ぽんと、持っていた紙をマジックで見事に消して快斗はにやりと笑んだ。満足そうな彼に対して、新一と平次は不満そうな顔をしている。

「おめー、それ本気で聞いてんのか？」

「本気だぜ」

「何や、黒羽が出すクイズだからどんな難しいものかと思っとなら…、そんなくだらんものか」

同時に溜め息をつく二人。しかし、快斗はそんなことを言われても嫌な顔一つしない。それどころか更ににこにこ気持ちの悪い笑み

を向けているだけだ。

「では、お聞きしてもよろしいでしょうか？名探偵」

つまらなそうな顔をして、二人はそれでも答えを同時に言った。

「将来の夢だろ」

「理想の自分や」

しかし、綺麗にハモることはなく、異なる言葉で二人は答えていた。互いに見合わせて、またあの喧嘩モードに突入。

「何言ってるんだよ、これはどう考えても将来の夢だろ！」

「あほう！理想の自分やないか！」

「どーどー、落ち着いて。どっちも正解なんだから」

「「ああ？」」

意味不明なセリフに二人は同時に快斗を睨んだ。しかし、彼は負けることなくまたにつこりと爽やかな笑顔を二人に向ける。新一の顔に似ているためか、後ろで蘭が密かにトキめいていることは誰も知らない。

「鏡は自分。光は望みや希望。だから将来になりたい自分。つまりは将来の夢や理想の自分でも当てはまるだろ？そして、それらは常に自分の中で疼いてるってね。つーわけで、どっちも正解なんだよ」

快斗の説明が加わっても、二人はまだ納得できなそうに不細工な表情を浮かべている。

「よし、じゃあこれで引き分けになったから互いに大人になって今回の喧嘩はおしまいな。ってーわけで、皆でこれからお茶しに行かないか？」

「お茶？皆で？」

「ああ、青子がもう待ってんだよ」

「青子ちゃんが？えーよえーよ、ほら、平次そなんぶっさいくな顔してへんで行こ？」

和葉はまだ渋る平次を無理やり引っ張って快斗の後に続く。それを半目で見つめる新一の前にはもちろん、蘭がいた。

「いいでしょ？新一」

「誰も駄目だとは言ってねーよ。しゃーねーなあ、ケーキでもおこ」

ってやるよ」

「やった！ありがと、新一」

こっちは隣に並んでその後を追う。何だかんだで結局快斗に丸め込まれたことが唯一の心残りだが、今回は二人の女性の謝罪を込めて身を引くことにした。

五人は青子が待つカフェへと急いだ。

けど、

ぜってー次は引かねえからな！

絶対次は引かへんで！

二人の喧嘩はやはり、これからも度々見られることだろう。

（後書き）

こんにちわ、三亜野です。今回はかなりどうでもいい話を書いてみました。

平次と新一って仲いいけど、喧嘩も結構すると思うんですよね。しかも、かなりくだらないきっかけで（笑）

ってか、FFは書いてみたいとは思っていますが、自分が書ける範囲になるとネタが少ないですね。

誰かネタくれませんか？

では、また書くことがあったら、お会いしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4512e/>

誰の勝ち？

2010年10月15日00時15分発行